

東南アジアの畜産について

牧 野 忠 夫

I 食肉流通上の問題点

この点については残念ながら全く知見がない。おそらく東南アジアの食肉流通の現状は全く分かっていないのではないかと思う。参考になる文献すら目にすることがない。戦前欧州人たちは自分達だけで屠場をもっていたようであるが、牛肉などは欧州や豪州から冷凍肉を輸入していたようである。わたくしは近代的屠場としてはデンマークが借款と技術援助を与えて建設したというバンコク港近くの屠場をみただけである。しかし、それがどのように運営されているかは知らない。

東南アジアの畜産に関する援助問題を考える場合、日本としては東南アジアの牛を食肉資源としてどのように開発援助していくかということが最も重要な問題であると考えている。印度牛系の品種の肉のことは知らないが、中国牛系の品種の肉は、カンボジアで特に頼んで田村大使に御馳走になったが、肉繊維がファインで相当美味であった。したがって、改良方法によるしきを得れば将来有望な肉資源となると思う。そのためには、何よりも防疫体制の確立と防疫の完全な実施が前提として必要であるが、現在の役牛飼養慣習を、かつて日本がそうであったように、役肉牛飼養慣習に切り換えてゆくことが必要である。このためにはおそらく30年以上の長期にわたる、インテグレイテッドプランを立てて、それに基づく重点的なしかも忍耐強い技術援助が必要である。この場合、役用牛の役肉用牛化のための品種改良には、洋種の肉用牛を利用するよりも和牛を活用したほうがより有効であろうと考える。かつて日本がタイに行なった肉牛飼養援助は良くも悪くもこのような畜産技術援助の例になっていない。あれは単に和牛をタイで飼おうとしただけのものであった。

東南アジアの牛肉資源を開発輸入するためには、相当長期にわたって、各国に伝染病のない無病圏、つまり半径 50 km くらいのディジーズ・フリー・ゾーンを設定してもらい、日本側も参加してそのゾーンの中の防疫の完璧を期し、そこで一定期間飼養され無病であることを証明された牛より生産された牛肉を輸入するという措置が必要となる。これは理論的にはともかく、実際には先方の防疫体制の不備、特に獣医の不足やまた先方の面子の問題などによって実現は全く困難である。かつて、この種の措置について、タイにアプローチしたことがあるが、結局内政干渉云々の問題により実現しなかった。

II 防疫について

東南アジアの畜産振興には何といても防疫の確立が最優先問題である。最近、タイやマレーシアでは多頭飼養畜産の発展に伴いむしろ畜産に関する経営経済の指導を要望する声が出てきており、先進国や世銀等の国際機関のコンサルタントもそのようなことをいうようになってきている。しかしこれは畜産の本質を知らない者の危険な言葉であろう。防疫体制の確立がなくては畜産の振興は期待できないということを肝に銘じてほしいと思う。今日の日本の畜産をみれば、このことは十分理解されるはずである。日本が東南アジアに行なうべき畜産技術援助は、まず防疫面、ついで品種改良、それから経営経済面という順序で進められるべきである。

III 酪農の将来性と飼料問題

東南アジアでは酪農は高度 600-800 m 以上の高地でならば何とか考えられようが、低地部では少なくとも洋種の乳用牛による西欧的な意味でのあるいは農民的な意味での酪農は将来性はないといって差し支えなかろう。東南アジアのエリート達は生乳の潤沢な供給を熱望しているが、彼等のためには効率が悪いために高価とならざるを得ない搾乳業者的牛乳生産があれば良いであろう。しかし、大衆のための牛乳生産はまずできないといえる。

先日も東南アジアの各地で大衆が一樣にコンデンスミルク特に加糖煉乳を愛飲する風習があるのを見て、牛乳需要の潜在性を論じた人があるが、彼等にとってはコンデンスミルクとフレッシュミルクとは飲物として全く異質のものであることを十分に承知してもらいたいと思う。つまり、彼等は煉乳を牛乳の代用品としてはみていないのである。このことは、より牛乳の代用品としてすぐれている粉乳類の利用の程度をみれば容易に理解されよう。少なくとも現状を前提とすれば、生乳を十分に供給しても彼等の煉乳輸入は少しも減少しないであろう。

洋種の乳用牛をもって東南アジア原産牛を乳用に改良することは真に至難の業であることはタイでデンマークのやっている酪農農場をみれば分かると思う。米国はその南部における酪農の振興をはかるために 1940-50 年代に乳用系の印度牛を導入して適品種の開発をはかったが、うまくいっていないようである。わたくしとしては、乳用系の印度牛の改良や乳用水牛の改良について学問的な興味はもっているが、これは非常に金と時間のかかる仕事である。

東南アジアで酪農が困難な例の大きな理由は優良な青刈飼料や牧草類がないということである。このような優良粗飼料源を開発し、それらを有利に栽培できる方法が確立されることは重要な宿題である。アフリカ等では先進国や国際機関の手で種々研究が行なわれているが、東南アジアについては有望植物が探究されている程度である。したがって、この面で日本が開発援助あるいは研究援助を行なうことは有意義であると考えられるが、日本にそれにたずさわる専門家が十分にいないのが実情である。

濃厚飼料については米ヌカや雑豆類が主に利用されている。しかし特にそのために作られている作物はない。しかしながら、豆科植物の中には非常に有望なものがある。タイではバイ・カティンと呼ばれているようだが、ギンネムがその好例である。ギンネムの葉はタイ人は強壯に効ありとして食用にも供しているが、この葉のミールの養分はアルファルファミールと同等ないしはそれ以上の価値を有しているから、これを上手に採集集荷して人工乾燥しミールにすることなどを、開発輸入の面から研究することは非常に有効であると考えている。

コメント2

熱帯の飼料作物について

佐藤 孝

ここで問題になっている乳牛ではなく役牛や豚を対象とした粗飼料について述べる。

東南アジアの人は飼料作物を栽培することは考えない。野草でも刈り取って与えることはほとんどない。乾草やサイレージにして乾期の草の欠乏したときに与えることはなおさら考えてもいない。乾期の草の不足で役牛は痩せて最低の体力状態にあるとき雨期に入る。この時役牛としては耕耘のため最も労働を要するのである。

熱帯の平地ではクローバやアルファルファのような温帯の優れた豆科飼料作物の栽培は出来ないが、熱帯を訪ねた人は豆科植物が、草本生の立性、蔓性のもの、灌木から大木に至るまできわめて豊富なことに驚くだろう。この中には根瘤を形成しないものが多い *Cassia* spp. 等の類も多いが、大部分は根瘤菌によりNの固定をし、深根性で深い層の養分を吸収し、結果として浅根性作物の根圏の富化をもたらす。何としても豆科作物を輪作中にとり入れ、間・混作し、また休閑地作物としてエロージョン防止や地力更新のためとり入れなければならない。わたくしは豆を収穫し、自家用の食糧とし、または換金し、残りの茎葉を飼料にして家畜の糞尿を土地へ還元するという点から豆科植物を主としてみてきた。次に飼料として利用される可能性のある豆科をその植物的特性から栽培法を分類してみよう。

I

1) 雨期に主作物の栽培をさまたげることなく取り入れられるためには短期作物であり、日生産量の大きいものでなければならない。次のようなものが考えられる。

リョクトウ、カウピー——豆も若干とり茎葉を飼料とする